

はじめに

平成31年（令和元年度）は、前年と一変して雪の少ない年となり、越冬作物の生育が進み、麦、たまねぎで単収が向上しました。水稲では高温による胴割れ、乳白、カメムシ被害が危惧されましたが、主要品種で1等米比率90%以上を確保するなど気象変動に対応した農作物管理等で良好な実りが得られた年であったと思います。

当事務所では、平成31年度（令和元年度）も県普及活動方針と県農業・農村ビジョンを踏まえ、市町・JA・農業者団体からのご意見やご要望を伺いながら、地域の重要課題や先進的な課題を普及計画に設定し、取り組んで参りました。

担い手育成については、山川幸一氏が中日農業賞で優秀賞、(有)たけもと農場が日本農業新聞社賞を受賞したほか、担い手育成支援チームは育成すべき担い手を明確化するとともに、重点地区・重点対象者を設定し、農地中間管理事業等を活用した担い手への農地集積や経営改善、園芸複合化、新規就農者の育成等に取り組みました。さらに、民間企業の経営手法を活用して作業効率や収益性を改善するモデル経営体の育成を進めるなど、担い手の経営力強化を支援しました。

水稲においては、気象変動に対応して適期管理の情報提供を行うほか、「高密度は種育苗栽培」技術や晩生品種「ひやくまん穀」の普及拡大を進めました。「ひやくまん穀」の品種特性に応じた栽培管理については、管内の「ひやくまん穀」全生産者を対象にした現地検討会を開催しました。また、酒米「百万石乃白」の現地試験は良好な成績となり、次年度生産に向けて弾みがつきました。

「ルビーロマン」は、壤土に応じた栽培管理、加温作型の生産拡大、篤農技術を見える化した学習支援システムで若手生産者の出荷量を増やすことができ、「加賀しずく」出荷体制整備では令和3年度稼働に向けた出荷体制づくりを進めました。「エアリーフローラ」は新規栽培者の掘り起こしや出荷率向上などで出荷量の増加に取り組むほか、「加賀丸いも」適地ほ場マップの作成、省力化技術の導入・拡大を進めました。

園芸産地の育成では、JA 能美のたまねぎ生産拡大に対応した乾燥調製選別機の導入、JA 加賀のブロッコリー・カボチャ集出荷施設、JA 小松市のトマト・きゅうり・ニンジン集出荷施設の事業計画作成について支援するほか、他産業との連携においてトマトで長期どり作型の単収向上や出荷予測システムの構築に取り組みました。さらに、JA 出資型法人による新規参入者を受け入れる組織体制づくりなどを働きかけました。また、JA 加賀かぼちゃ部会におけるJGAP取得の支援も行いました。

畜産では、衛生管理指導を実施するほか、鳥インフルエンザ、CSF対策を行い、特にCSF対策ではイノシシの採血による感染調査を市町、猟友会と連携して取り組みました。

里山振興では、国造ゆずの産地育成による中山間地域の活性化を支援しています。

さらに、関係機関と連携して南加賀管内の栽培施設台帳づくりを進め、インターネット上で台帳情報を共有、マップ提供する仕組みを構築し、施設情報がスマートフォンで見られる利活用を開始するなど、普及活動の連携、効率化に努めました。

最後に、この一年間の普及活動に当たり関係各位へ感謝申し上げますとともに、南加賀農業のさらなる発展に向けて、今後とも普及事業の推進にご支援ご協力をお願い申し上げます。

令和2年3月末日

石川県南加賀農林総合事務所
農業振興部 部長 池野 明夫